福井　貞助　著

伊勢物語と古典文学

風間書房

伊勢物語と古典文学

二〇〇〇年五月一五日　初版第一刷発行

著者　福井貞助

発行者　風間務

発行所　株式会社　風間書房

101-0051　東京都千代田区神田神保町一―三四

電話　〇三―三二九一―五七二九

FAX　〇三―三二九一―五七五七

振替　〇〇一一〇―五―一八五三

印刷　富士リプロ

製本　高地製本所

©2000 Teisuke Fukui　NDC分類：913

ISBN4-7599-1208-8　Printed in Japan

はしがき

平安時代に伊勢物語という歌物語が生まれた。これは千年以上ももてはやされ、少なくとも八百年も前から研究されてきた。この伊勢物語は一体どんな古典なのか、いかような滋味があるものなのか、というようなことを書いたり話したりしたことがしばしばであったので、まずそれらをもとに書き加えて概観とし、歌物語や伊勢物語についての、物語史的観点からの論、本文流布や解読上の各問題を取り上げた論考の諸篇を中心に置き、かつ伊勢物語をめぐる著者の回想、さらに伊勢物語のみならずこれに関連し、あるいは著者の関心の及んだ他の古典文学についての随想や小品を挿入したのが本書である。さまざまなものを包含しているようであるが、核心は伊勢物語の研究と古典の玩味にあって、文筆の多くはそれに向けられている。この書は伊勢物語にならって小冊ではあるが、微力ながら著者の辿った研究の道程を回顧した、ささやかなまとめの意味をも持っている。

平成十二年一月

福井貞助

目次

はしがき

第一章　概　観

1　業平物語の生誕……三
2　伊勢物語は何を書いたものか……一五
3　伊勢物語と日本文化……四二
4　伊勢物語名所と本の伝来……六〇
5　伊勢物語について……七七

第二章　論　考

1　歌物語両作の差異……八七
2　宇津保物語と歌物語……一〇八
〔附説〕宇津保物語と伊勢物語及び在原姓の人物について……一二七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

3　朱雀院塗籠本伊勢物語の流布……一三七
4　業平自記説から見た伊勢物語……一五三
〔追考〕芥河、筒井筒、あやしき藤の花段……一六八

第三章　回想と随想
1　私と伊勢物語……一七九
〔追記〕……二一〇
2　ホメロスへの連想……二一四

第四章　雑説及び小篇
1　伊勢物語風物誌……二三一
富士と「しほじり」……二三一
都鳥……二三二
古人の読み……二三六
2　源氏物語と大堰・桂……二三八
附　源氏物語の索引と事典……二四二
3　枕草子、更級日記寸見……二四四

4　更級日記東海道旅の記考……二四九
5　月影が谷断想―阿仏尼のこと―……二六二
6　鷗外『澁江抽斎』のこと……二六六
7　神田上水の流れ……二七三
8　万葉二題……二七九
　射干玉と浜木綿……二七九
　「カルチャー万葉の記」など……二八二
9　百人一首を語る……二八五
10　三極花の詩……二八九
11　ナポレオンの墓……二九一
12　漱石と矢一……二九三
あとがき……三〇一
索　引……三〇七

第一章　概　観

1　業平物語の生誕

閑麗翁事実

和歌が生まれて以来最も古く偉大な歌人を歌聖という。柿本人麻呂は歌聖である。また古来のすぐれた歌詠みを歌仙と称した。在原業平は平安初期に出た六人の歌仙、つまり六歌仙と称された一人である。平城天皇の皇子阿保親王の五男、母は桓武天皇の皇女伊都内親王といった身分の人で、天長二年（八二五）に生まれ元慶四年（八八〇）に亡くなっている。そして業平が死んでから二十年ほどして編まれた『三代実録』の記事は、我が国の正史である六国史の一つに見えるのだから信用してよいものであるが、そこに業平の小伝と人物短評が記されている。それはかなり有名な、

業平は、体貌閑麗、放縦拘わらず。略ぼ才学無くして、善く倭歌を作る。

というものである。砕いて言えば「お顔だちやらお姿は、美しくまたみやびやか、自在な振舞いしばしばで、四角い文字の物学び、まじめなお勤めさほどじゃないが、心の糸をかきならし、情をのべるのやまと歌、これなら見事業平様は」といったところであろう。

まず業平は「体貌閑麗」だとあるから、本当に雅やかで麗しい人であったに違いない。後世今業平などいう言葉ができたくらい、業平といえば美男の代名詞である。その源はこの体貌閑麗の評判にある。しかしどのように美しい面

相であったかは不明であって、後代に伝わる業平画像は各時代の好みに合わせて美しく画いたに過ぎない。伝えられる美しい業平のイメージは、専ら恋歌の世界から来た内面的な幻想である。

一体延喜元年（九〇一）に完成奏上となった史書『三代実録』は業平の存生時を知っている人によって書かれたはずである。史学者坂本太郎氏はこの実録の形式的な撰者とは別に執筆者としては菅原道真、大蔵善行の二人を問題の人物と見て検討している（『古典と歴史』）。氏は善行が執筆者で道真の意見が文章の上に反映されていると解したいが、二人が執筆に関しどのようであったかを確定するのは難しいと言っている。いずれにせよこのような執筆者の姿を念頭に置くことが出来る。

『三代実録』の業平に関する表現は、業平と伊勢物語の間の空白をつなぎ止める資料のように思える。「体貌閑麗」とは執筆者の記憶そのものでもあったろうし、世評を加えたものでもあったろう。後に出てくる「略無才学」とはこのような才学の人たる執筆者にして当然の言であったろうし、これに続く「善作倭歌」と対をなす文飾でもある。「放縦不拘」とはまた世評に基づいていようが執筆者の顔も出ている。この時点で何らかの伊勢物語の形が出来ていたと見るのは無理としても、少なくともこういう見方を基として伊勢物語は作られたと考えてよい。この物語の主人公業平は美男であったという、しかしどのような容貌の男かその形はなかなか浮かんでこない。そこで業平に近接するために、もう少しその伝記をはじめ歌とか物語とかを案じてみてはどうだろうか。

業平の父阿保親王は業平が生まれる前、奈良の都に復帰を目指した父平城上皇の寵姫薬子及びその兄藤原仲成の起こした反乱、いわゆる弘仁元年（八一〇）の薬子の変に連座して、九州の太宰府に流されていたことがある。十数年後許されて帰京した親王は伊都内親王を妻とし、業平が生まれた。業平には行平の他、仲平、守平の兄弟があったが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『三代実録』に業平は阿保親王の第五子という。だが伊都内親王にとって業平は一人子であったらしい。承和九年（八四二）五十一歳で亡くなった父は『続日本後紀』に「膂力有り、絃歌に妙なり」と書かれているから力の強い丈夫と考えられるが、母は角田文衛著『王朝の映像』では現存する伊都内親王の手形から推すと小柄な人だったらしいと推定する。業平は芸能の才は父譲りであっても、体格は母に似てむしろ優形な人だったかもしれない。

業平の生い立ちと従四位上近衛権中将に至り五十六歳で卒した官歴だけでは、業平は波乱幻夢に満ちた人生を送ったとは想像されない。ところが業平をめぐって、当時天下の権を握る藤原氏に抗した英雄との見解の生じたのも古いことである。たとえば近代に入っても明治三十四年に刊行された栗島狭衣の『詩人業平』という小冊子には、ロマンチックな香り高く中将業平を其の種の雄々しき軍人と見ている。これは伊勢物語の中にも見られる、業平の惟喬親王への敬愛と親近が原因で藤氏に対抗する人物とする。この親王と業平との関係は、狩の使段すなわち伊勢物語六九段に出てくる伊勢斎宮の物語から尾を曳いている。業平が伊勢に使した時斎宮は親族だったから厚遇された、そして恋に落ちたという話である。恋物語の極致、神域に仕える皇女、神の妻との恋である。それらの人々と業平の実際の関係は末尾に掲げた系図で示される。（口絵第一、二図参照）

伊勢物語によれば業平は惟喬親王に敬愛の情を捧げているので、恐らく史上の関係は、業平は妻紀氏の縁で、惟喬親王に親しんだということになろう。惟喬はのちに清和天皇となった惟仁親王に六歳ほど年長の兄にあたる。惟仁の母は藤原氏なので、一歳で皇太子となった。母が紀氏の惟喬はおしのけられた身ということになり、この皇位継承をめぐる藤氏の力のうわさは、早くも当時からささやかれていて、『三代実録』巻第一にそのころ人々の口に載った時勢風刺の歌と見られる童謡が書かれている。大枝――他の兄たち――を騰り超えて、鳴が飛んで来て我が田に餌をあ

さり食んでいる、というものだ。とはいえこの時に惟喬はまだ七歳、伊勢物語から想像されるような、惟喬に親しく供をして歌や酒宴遊覧に過ごした男が、にわかにこの主が失意隠遁したのを悲しみ、雪の小野に「忘れては夢かとぞ思ふ思いきや雪ふみわけて君を見むとは」と歌うなどというのは、歌はたしかに業平のものであっても、専ら皇位継承事件で惟喬出家と解するのは、事実としては異なっている。惟喬は出家の時は二十九歳、六年前に母紀静子を失っていて世を儚んだという見方ができる。物語とは事実を基にしてもあくまで作り物である。ただ業平をいとおしむ心情はその奥底で作意に繋がっているのだろう。

平安和歌の始まりと業平

万葉集を見ても、古代歌謡を眺めても、懸想恋愛の歌は断然群を抜いている。万葉の歌はすべて相聞、挽歌、雑歌に三分類されるが、求愛の歌、男女の掛け合いの歌は文学の起源に関わる事実を暗示し、我が国の古典和歌はまさに日本詩歌の特色を物語り、これと密接して起こった物語はそれらの事情をほのめかしている。和歌史は万葉から平安朝の歌に至るあいだの一時的断絶を説くが、確かに平安朝の初頭には唐風文化に押されて、宮廷とか文化人の間とかでは表面的には和歌は振るわなかったように見える。しかし恋歌の水脈は脈々と続いていたことは古今集の序文の語るところである。だからそこで挙げた六人の歌詠み、つまり業平を含めた六歌仙、この歌人達の歌は平安朝に復興する和歌を作ったもので、伝統をつぎ新味を加えて華やかに展開したのである。業平の歌が恋を主としたのも当然であった。

業平の歌として確かなものは、業平の没後三十年あまりで編纂された古今集に歌の作者として業平の名が書かれて

いるものである。これは全部で三〇首ある。そのうち一一首が恋歌である。古今集の中で歌の数の最も多いのは紀貫之で、これは撰者である。撰者以外では業平の歌が最も多くとられている。いったい古今集は全二〇巻の中、恋の歌の巻は四季歌の巻として数えられる六巻に次いで多く五巻もある。従って業平の恋歌も多いのであるが、個人として一一首も採られているのは、やはり業平が恋歌の名手であったからに他ならない。古今集の業平の歌に特徴的であるのは、物語風な詞書がついているものが多く見られることである。これは貫之の作ったものか、あるいは伊勢物語と関係があるものか、あれこれ考えられてきたのだが、すでに古今集の資料となった古い業平集にそうあったのであろう。その資料が伊勢物語であったか、あるいは業平集がそうよばれていたものか否かは分からないし、仮定される貫之の業平歌を用いた物語風な編纂ぶりなるものも、どれほどのものがあったか不明である。

いずれにせよ新しい平安朝の華麗な恋歌から、恋歌を主軸とした物語が誕生したのである。これは日本文学史上注目してよいことである。ただ伝承を集め、説話を編集するといったものではない物語なるものが生誕したのである。しかもこれは、或る程度年月をかけて熟成したといってよいような作られ方をした。業平の物語が生成したのである。実在人業平の物語だから恋ばかりではない。背景に業平の属した階層の人たちによる平安の世の中のことがらが匂わされている。ただ歌及びそれを語った物語だからこまごまと世上の事件などを書き記しはしない。だから虚構の生成をなしやすい。ただしそこに貫かれているものは確かにある。

伊勢物語は業平を思わせる「ある男」が、元服して奈良の旧都で美しい女性に恋歌を贈るいわゆる初冠の段（→二二頁）からはじまるが、ここにはさきの古今集で業平の歌と証されるものは出てこない。これに続く次の第二段の歌は古今集で業平の歌としているものである。

昔、男ありけり。奈良の京は離れ、この京は人の家まださだまらざりける時に、西の京に女ありけり。その女、世人にはまされりけり。その人、かたちよりは心なむまさりたりける。ひとりのみもあらざりけらし。それをかのまめ男うち物語らひて、帰りきていかが思ひけむ、時は弥生のついたち、雨そほふるにやりける。

起きもせず寝もせで夜をあかしては春のものとてながめくらしつ

昔、男がいた。奈良の京は遠く離れ、新たに移ったこの平安京は、人の家がまだきちんと建ち定まらなかったそんな草創時に、更にさびしい西の京に女人が住んでいた。その人は、この京中に聞こえた誰彼の人々よりもずうっとすぐれていたのだった。また容貌よりも心がすぐれていたのだった。どうも独身というわけでもなかったらしい。その女に例の誠実男が、親しく情を通じて、帰ってきてどんなに恋しく思ったのだろうか、時は三月の一日、春雨がしょぼしょぼ降る折に、歌を詠んで贈った。

おきもせず…あなたと一夜の語らいに、起きても、眠りもできないで、夜を明かして過ごしては、朝には春のならいとて、長雨が降っているのだが、それを見ながら物思い、一日を暮してしまったのですよ。

業平の歌は心あまりて言葉たらずと古今集の序文で紀貫之に評されているが、情熱的でそのような特色があり、繰り返し畳みかけるような表現が見られる。この歌は確かに業平的である。

現存の伊勢物語は後節に示すように、奈良の旧都での垣間見の物語からはじまるが、この段はそれに続くものでいよいよ舞台は京の都となる。平安京で生まれた伊勢物語はあくまで都人の意識で書かれている。しかもこの段はその始まりの自記に設定してある。業平が二十歳とすると、平安遷都から四十年ぐらいたったころとなる。作者は平安京の「人の家」がかなり定まった頃に、若き業平の昔をおもいやって書いたと思われる。すぐれた心の美しい女性に他の恋敵をも意識しつつ、思いにもだえる男の歌の数々と共にその心と行いを書き重ねる物語は始まろうとしているのである。業平の歌に基づいたこの段は、業平に重ね合わせた歌物語伊勢の主要な行く手を暗示しているといえる。

事実とそら物語

総じて作り事の物語であるから話は面白くなる。勿論業平の事実はちゃんと踏まえているところがある。それは業平の歌そのものと語りごとであり、恐らくさらに伝えられた尾鰭のついた噂であろう。平安の人々の楽しんだ歌は、物語の娯楽をはやらせた。伊勢物語は業平の和歌集の発展であるから、この歌集もふくれ上がるし、それにつれてそこから出たものは皆業平の物語と認められてくる。個人の歌集が土台になっているから自記のようにも日記のようにも見えるのである。業平作という伝えはこんなところから早くに生じた。伊勢物語を編み書きしるした人は、業平の名をかならずしも正面におし出そうとはしなかった。これも不思議の一つといえば言えるのではあるが、昔男で統一されたこの物語の中には「在五中将」「右馬頭」「在原なりける男」などの業平の官職名とか、業平そのものを示す呼称を挿んでいるところがある。これは業平の名を出さなくては成り立たない歌話もあって、物語作りが不統一に進み出たものであろう。多少とぼけているところもあるようなある程度のぼかしの方法の他は、意識的ではなく次第に形

造られたという編作経過のせいらしい。そら物語でいて実話めいてもいる、こんなところが伊勢物語らしい特色であるが、作者は単なる業平の逸話集とか、業平事跡の小説化を志したものでもなさそうである。歌にくるまった雅なる新しい人物像こそ人々の望んだところではあるまいか。事実をぼかして織り交ぜることにより豊富な内容を作り出していく、これが伊勢物語の方法であった。

さまざまな恋歌の短篇集は日本のドン・ジュアン物語を作り出す。西洋のドン・ジュアンは恋の遍歴の成果として、おのれになびいたあらゆる種類の女を掲げた長巻の一覧表を誇り、尼僧にまで及ぼうとするていたらく、ついに雷火にうたれて終わる。不思議に業平もまた貴賤都鄙老若に色めいて、大ぬさの引く手あまたの色とりどりに懸想し、心をくだき、ついに神聖な忌垣の中に及ぶ。この男の最期は、「つひに行く道とはかねて聞きしかどきのふ今日とは思はざりしを」と詠んだ業平辞世の歌の段でしめくくるが、その最期はこの終焉歌話の前の一二四段に、

昔、男、いかなりけることを思ひけるをりにかよめる、
思ふことといはでぞただにやみぬべき我とひとしき人しなければ

と歌っているように、様々な恋を振り返って思いめぐらしていたことになるのだろう。この歌は業平のものかどうかは分からないが、晩年の業平の歌と見ても本来のほとばしるような特色に欠け、悟ったような気分がある。物語としてはここに位置するのにふさわしいものであろう。かくして業平の歌や事跡、業平にあらざる人の歌、古歌、名歌、古伝承などを加えて膨れ上がって行き、形造られたのが伊勢物語である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com